

岡 一太著 / 長編小説

人生案内



岡 一太著 / 長編小説

人生案内



理論社刊 / JUNIOR LIBRARY

913/人生案内

岡 一太 (おか・かずた)

理論社/1965年初版

230 p/23 cm/菊判

人生案内

一九七七年二月 第十刷 ©

作者 岡 一太

制作 小宮山量平

発行 山村光司

発行所 株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一〇四
電話(〇三)五七九一(代表)
振替東京九一九五七三六

はじめに



平和とは？ 民主主義とは？

そして、自由とは？ 愛とは？

——きみたちは、教えられ、読み、やがて、自分で考え、自分から胸をはって、自分たちの時代にふさわしい答えをかかげるでしょう。その瞳^{ひとみ}のかがやきは、やがて、きみたちの時代をつくりだすことでしょう。

*

そんなきみたちの歩みに、わたしは、何を贈ったらいいいのでしょうか？

わたしは、ふと、考えるのです。きみたちは、ロマン・ローランを読み、アンネに感動し、もしかするとベトナム映画「キム・ドン」を見たりして、世界のいたるところに、愛にめざめ、平和を守り、自由のためにたたかってきた、多くの心の友をすでに見出していることでしょう。でも、きみたちは、〈あの人〉のことを知っているでしょうか？

*

〈あの人〉たち——名もなく、そっと、歴史の底



に生きた人たち。埋もれること、耐えぬくことだけを、よく知っていた人たち。

そんな人たちが、この日本にも、けっして少なくはなかったことについて――。

それは、もしかすると、きみたちの父であり、母であつたかも知れないということについて――。

わたしは、こうして、〈あの人〉について語らないではいられないのです。

*

平和も、愛も、自由も……それらはつねに、それを守り育てた人びとの、数かぎりないたたかいの中にあつたといえましょう。〈あの人〉は、そんなたたかいの中にいたのです。いま、この日本をみつめて、〈あの人〉たちは、わたしたちに語りかけようとしているのです。天の声は遠く、巨人の声は大きすぎるかも知れません。しかし、わたしたちの父であり母である〈あの人〉の声は、わたしたちの心を、身近にあたたくはげましてくれるのではないでしょう。

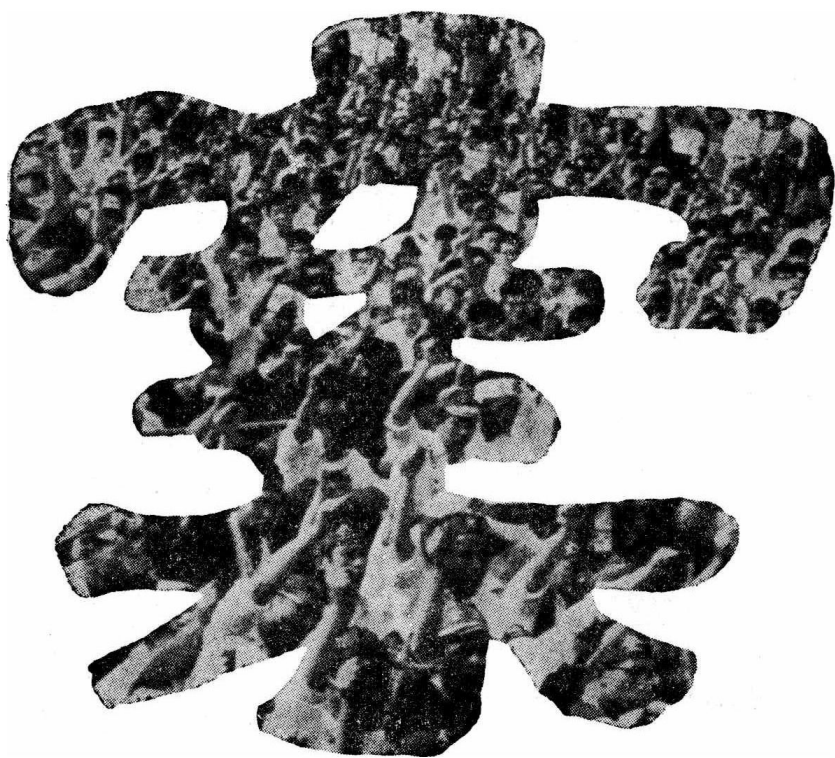
著者



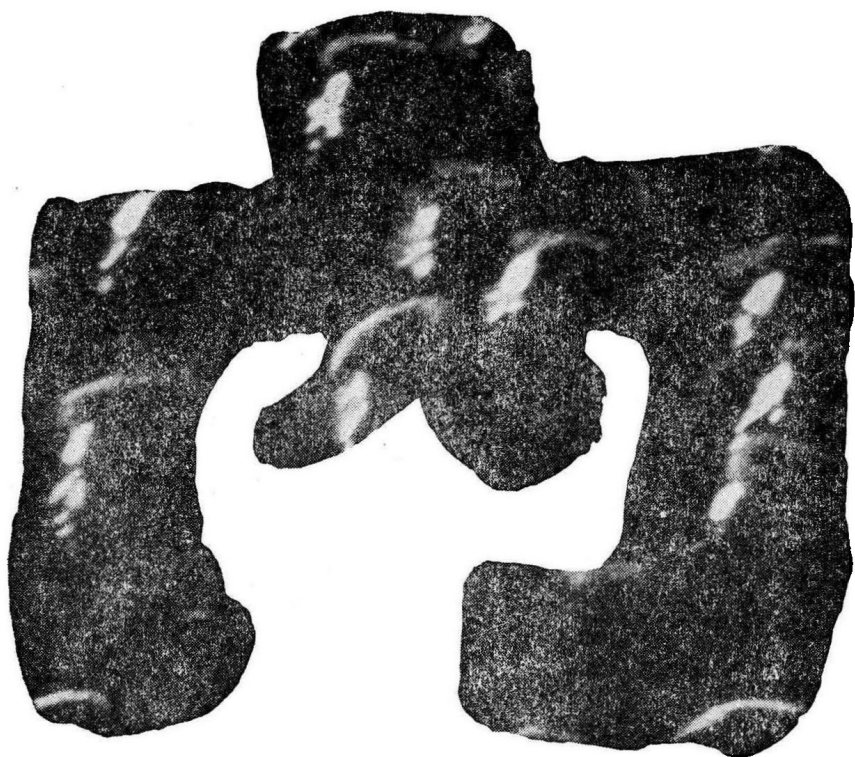
長編小説

人生案内

もくじ



14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	序	はじめに
勇者の退却	長い一幕劇	トップ記事	深夜のお客さん	秘密	小さいさかい	傷あとはどうしたのか?	「人生案内」	変てこな夜	父の訪問	おかしな人びと	兵隊の手紙	美しいポスター	めぐりあい	章	
140	128	119	112	103	95	85	75	67	57	44	34	22	11	7	1



そうてい／さしえ 滝平二郎

20	19	18	17	16	15
あとがき……………	その旗を守って……………	急務……………	悪い予感……………	村の家で……………	ビラ……………
229	215	202	185	174	161

もくじ

作者紹介

岡 一太（おか・かずた）



一九〇三（明治三六）年三月、岡山県生まれ。同県私立関西中学校卒業後、教師、雑誌・新聞記者などいろんな職業につく。

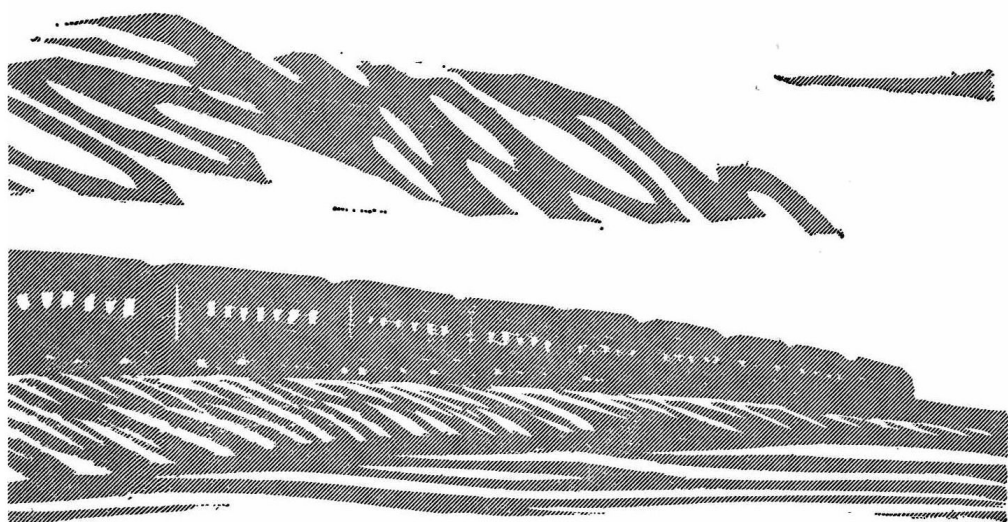
昭和の初期、プロレタリア文学やプロレタリア・エスペラント運動に投ず。前者では、『少年戦旗』その他に『憎いこん畜生』『赤と白』『同じ仲間』『ピラ刷り』その他の童謡を発表、エスペラント訳を通じて外国作家の作品なども訳す。後者ではエスペラントで小説をかいいたり、プロレタリア文化連盟関係の雑誌に資料を提供した。

一九三八（昭和一三）年春、北京にゆく。のち敗戦まで天津にいて魯迅その他中国作家の著書をあさり読んだ。敗戦の翌年、故郷に引揚げ、政党、労働組合で働きながら児童文学の仕事再開した。

主な作品では短編に「ただの小さなネジ釘の話」「村で一番の吹き井戸」「赤いリボン」長編に「いつも希望を」その他がある。劇作では「歌をわれらに」「小犬の幸福」「エスペラント物語」「緑の星の下に」「同じ太陽のもとで」「生あるものは答えよ」「秋の夜のお客さん」「山びこ」その他、ラジオドラマ、音楽劇など多数あり。エスペラントを児童文学に持込んだ功労で一九五三（昭和二八）年、小坂賞を受けた。現在、関西学園図書館主任。

序 章





東京ゆき急行「つくし」は、もう、備前平野のまったなかを走っている。ゆたかにみのったブドウ畑が、窓ぎわをかすめる。

その列車は、怒りをのせている。

車内は、興ふんに、ふくらんでいる。

——日本を戦争にまきこむ条約は、ごめんだ！

——民主主義を守れ！

誰もが、口には出さないけれど、熱気をはらんだような沈黙が、かえって、一つの大きな意志をあらわしている。

アンポ・ハンタイ

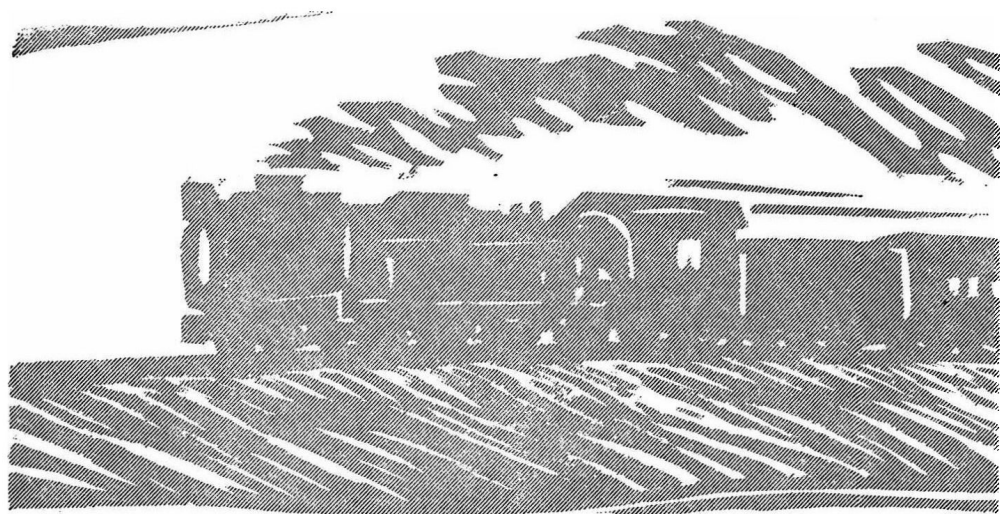
アンポ・ハンタイ

.....

街々で、こどもたちは、祭りばやしのように叫んでいた。もちろん、こどもたちは、その言葉の意味を知らないだろう。しかし、いつか、こどもたちまでもとらえたほどの、この日本の怒りと興ふんの日々を、思いださだろう。おとなたちが、何を心配し、何を怒っていたのか——それを知る日は、やってくるだろう。

ぼくにも、それに似た思い出がある。

十年以上まえ、おとなたちが、怒りと興ふんにもえたぎっていた日。はげしい瞳、高い歌ごえ。そして、ぼくはまだ、母にまつわり



つきながら、それらの情景をながめていた。

ぼくが、〈あの人〉をはじめて知ったのは、そんな情景のなかで
だった……。

早いものだ。いま、ぼくは、自分からその怒りのスクラムのなか
に加わっている。

この列車には、ぼくたち大学生のほか、たくさんの労働組合代
表、市民代表たちが、同じ思いに一団となって乗っている。列車の
両側には、国鉄労働者によってその要求を大きく書かれたビラが、
はりつけられている。列車は、そのまま、東京に向かう行進だ。そ
して、ぼくは、この行進のスクラムの中で、〈あの人〉のことを考
えつづけている。

——〈あの人〉まで傷つけられるなんて、ほんとうに、なんてこ
とでしょう！

列車の出発まぎわまで、なん度となくくりかえされた母の声はぼ
くの頭に、やきつけられている。

〈あの人〉は、すでに何日前か、〇市の代表の一人として、東京
へ先発していた。あの六月十五日の夜、国会議事堂をとりまいた巨
大な怒りのなかには、〈あの人〉もいた。そして、一人の女子大学
生のむごたらしい死が、このたたかいの忘れがたい記念としてのこ



された夜、そのおびただしい流血のなかに、〈あの人〉の血も流されたのだ。

——ほんとうに、なんてことでしょう！

母の声は、よみがえる。そして、〈あの人〉は、そんな母を、かえってなぐさめるような笑顔で、ぼくのゆくてにあらわれる。

——だいじょうぶだよ、〈あの人〉にかぎって、ちよつとのことじゃ、へこたれやしないよ！

ぼくは、その言葉を、なん度となく母におしつけた。そして、いま、自分で自分に言いしかせるように、その言葉をくりかえす。

——だって、〈あの人〉は、ムスターファだもの……

〈あの人〉の笑顔につりこまれたように、ぼくも、思わずほほえんでしまう。

列車は、走りつづける。

〈あの人〉のいるところへ、ぼくの心は、走りつづける……。

〈あの人〉とのめぐりあいの日から、ぼくの心の中で廻りはじめた歴史の歯車は、いま音高く、一秒一秒を刻みつづけている。遠い日々から、今日のはげしい怒りの日までを、ひとすじにつなげる思い出が血のように脈うつ。

1 めぐりあい



一九四九（昭和二四）年だったから、ぼくはまだ小学校の三年生だった。十二月ははじめの日曜日の朝、森茂という父の名の氣付で、一通の手紙がまいこんだ。父はずっと以前、戦争中に亡くなっていたので、このあて名を見たときは、ずいぶん変な氣がした。おまけにそれは、むずかしい漢字ばかりの長い名の会の案内状だったので、ぼくにはてんで読めなかった。母に聞いてはじめて、それは働く人びとを幸福にする社会をつくるために身をささげて働いて死んだ人たちの追悼会だということがわかった。しかし、まだ何も知らなかったぼくには、父が何故そんなあつかいをうけるのかわからなかった。

ところが、その手紙を読んだときの母のあわて方と言ったらなかった。案内状が思いがけなかったばかりか、郵便のおくれで、ギリギリの時間にやっと配達されるという始末だったからだ。その日の午後二時からじまる会に間にあうためには、すぐ家をとび出しても早すぎはしなかった。それに母は村人相手に小さな日用品店をしていたので、それを閉めたり、近所の人に留守をたのんだりしていると、けっこう時間は食うし、忙しい目もしなければならなかった。それだけに、間よく〇市ゆきの定期バスに乗れたとき

には、思わず二人顔見あわせてニコリしたほどだった。

会場はA川をへだてて公園の森の見える役場のような建物の二階だった。その広間には、もう三十人ばかりのおじさんやおばさんがつめかけ、火鉢をかこみながら、にぎやかに話しかついていた。正面にしつらえた祭壇には、たくさん写真がならべられ、それをうずめるようにみずみずしい大輪の白ギクがにおっていた。そしてその前にはつややかなリングやミカンが、山のように供えてあった。ぼくたちはさっそく、その横の特別席に案内された。母は知人でもさがすように、あたりを見まわしていたが、別にたれに声をかけるでもなかった。しかし、目をかがやかせて、急に若がえったように見えた。

式は一分間の黙禱ではじまった。おとむらいにつきもののお坊さんの長ったらしいお経のないうのは、大助かりだった。そのかわり、見るからに頑固者らしいおじいさんやひと癖ありそうなおじさんが、つぎつぎと立って、ドラ声でまくしたてるむずかしい演説には、やはりウンザリせずにはいらなかった。

それだけに遺族（というのは、つまりぼくたちのことだが）の焼香があり、その代表になった青年がお礼のあいさ

つをして、式がおわったときは、じっさいホツとした。

あとは机をまるくならべかえ、みんな顔をつきあわせての座談会になった。まず一人一人自己紹介をして、亡くなった人たちの思い出を語りはじめた。すると、さっきとはちがって、会場の空気はグツとなごやかになってきた。それはさっきよそゆきの演説をがなりたてたおじいさんやおじさんが、気心の知れたうちわ同士らしくくつろいだ口調になったせいだった。もちろん、みんなの前にくばられた組合せキャンディやミカン、リンゴなどが、いっそうその気分をひきたてたということもあった。

しかし、みんなのシンミリと話す思い出も、中味はどうしてなかなかおだやかではなかった。まるで申し合わせでもしたように、トッコウ、リュウチジョウ、ゴウモン、ロウゴクなどいう言葉が矢つぎばやにみんなの口をついて出るのだった。それは深い憎しみとはげしい怒りとをこめて語られたが、そういうもののためにうらみをのんで死んだ、というよりは殺された人びとの名は、誇りをもって呼ばれた。そして、中にはお経のかわりだといって、今まで聞いたこともないような勇ましい歌を歌うものもあった。どうかすると、歌は建物をふるわすばかりの合唱になることも

あった。それはみんなの胸にはった弦を、いっせいかき鳴らさずにおかぬ共通の何かがあったからにちがいはなかった。

母にも番がまわってきた。母は父のことにはあまり触れず、父の友だちの思い出ばかりをなつかしそうに語った。ところが、そのあとがいきなかった。「あのころのことを思いかえすたびに、かならず思い出すなつかしい歌がありますので……」とことわって、母は自分の十八番の歌を歌い出したのだ。

おいらは子ども

小さいときから

見捨てられ

投げ出されて

おいらはみなしご

おいらが死んだら

だれかがおいらを

埋めてくれるだろう

けれどもだれも

知らないだろ

春が来りや

うぐいすがそと来て

鳴いてくれるだろう

おいらの墓場で

おいらはみなしご

それは、台所で茶わんを洗うとか、店のすみでミシンをふむとかいうとき、何かのはずみによく母の口ずさむ歌だった。それだけに、ぼくには子守歌みたいに大変なじみ深いものだった。しかし、不思議とこの歌は、ほかで聞いたことがなかった。だから、これは、ぼくの生まれないずっと昔の古い歌で、今ではすたれ、歌う人もないのに、ちがひなかった。そんな古くさい歌を、あまり上手でもなく、せに、うちならともかく、見も知らぬ人が大勢いるこんな席で歌い出すなんて、よっぽどどうかしている。赤恥かかなくうちに早くよせばいいのに……ぼくはハラハラし、恥ずかしくなって母の陰に小さくならずにはいられなかった。

ところが、思いがけないことには、母が歌いおわると拍

手カッサイがおこった。ぼくは、またも、あつけにとられってしまった。

ぼくはなんだか信じられない気持ちで、おずおずとあたりをうかがうように見まわした。すぐぼくの目をひいたのは、モウコ人にした顔つきをしたきょう会の司会者だった。ひどくこうふんして目をかがやかし、まるでひいきの歌手にアンコールでもするように、一番はげしく、しかも一番長くパチパチと手をたたいていたからだだった。ぼくはしばらく司会者の顔を見つめていた。すると二人の視線がパッタリあった。〈あの人〉は照れくさそうにニヤツとし、とまどっているぼくにおかまいなく、その細い目を一層細くして、何かものを言いたそうに何度もうなずいて見せた。

ところが、会がおわり、ぼくたちが帰り支度をしていると、〈あの人〉がみんなの間をかきわけるようにして近づいてきたではないか。そして〈あの人〉は、丸い顔いっぱい愛敬をうかべながら、母にピョコンとおじぎをしたと思ったら、ひどくなつかしそうに口を切った。

「あのう、森さん、わたしがわかりますか？」

思いがけなく声をかけられ、母はとまどった。母はまじ